

らいぶ 創 REATOR

NO.48
2009年12月
研究広報誌

学びの質の高まりをめざして

～課題に向かう
対話を深める～

CONTENTS

- 研究発表会より……………1
- 「研究会レポート(各教科・領域からの報告)」……………2
- 学習紹介：「小学校外国語活動の必修化に向けて！」……………3
- 学習紹介：「いろんな木のふしぎ～あきをいっぱい楽しもう！～」……………4
- 学習紹介：「電気エネルギーの実感！～複式高学年理科～」……………5
- 学習紹介：「ご当地ソングは魅力的～『紀伊万葉』山部赤人～」……………6
- 学習紹介：「物語を体験する読み～複式中学年国語～」……………7
- 新刊本紹介：和太附属小『質の高い学びを創る授業改革への挑戦』……………8

2009 教育研究発表会を終えて



研究主任
中井 章博

しっとりとした学びの雰囲気での授業でした。子ども達の声も態度も、素朴で自然なように感じられました。5年前からよく寄せていただいておりますが、学校の雰囲気が年々変化していることに驚かされます。また、学校全体のまとまりも高まってこられていると感じます。

現場が大事にしないといけない実践研究はこういうふうにあるべきなのだなあ、と学ばせていただいています。

「質の高い学びを創る 授業改革への挑戦」も最後まで読ませていただきました。教員の考え次第で学校は変わるんだ、と驚きをもって読ませていただきました。

(大阪府岸和田市の先生からのメールより抜粋)

5年間、本校のあゆみを見続けてきた小学校の先生から、研究会数日後、上記のメールをいただきました。「学びの質の高まりをめざして」というテーマのもと、研究を進め今年で3年目となりますが、そのあゆみは非常にゆっくりで、「授業の成立から学びの成立」への意識転換も、一朝一夕には為し得ないものでもありました。しかし、その改革がしっかりと参会者の方々にも伝わりつつあることをうれしく思います。今年も750名を超える参会者の方々にお越し頂き、研究発表会を催せたことに厚く感謝申し上げます。

我々は今年度、「課題に向かう対話を深める」というサブテーマを設け、子どもたちが自己の課題をもち、その課題に向かって対象・他者・自己と三位一体の対話を深めることにより、学びの質を高められるよう、実践を進めてきました。子どもたちをしっかりとみとり、支援する中から子どもの内面をさぐり、子どもの学びを見つめ、そして我々はどうすべきなのか、ということ問い続けてきました。

校内研では、子どもの学びを中心に研究協議を行うことはもちろんのこと、ワークショップ型やパネルディスカッション型、そして協議会型の事後研各3種類の形式から授業者が選択し、教師一人ひとりの学びが進められるよう、研修を進めてきました。研究発表会当日は、のべ23の授業を公開いたしました。どの教室も子ども一人ひとりの学びを大切に、個性ある教室の個性ある学びを展開できたものと自負しております。

ご講演をいただきました秋田喜代美先生（東京大学大学院教授）からは、次のような講評をいただきました。

- | | |
|--------------|--------------------------------|
| ①育ちが見える学校 | … 固有名で子ども同士が語り合っている。 |
| ②子どもの言葉の層の厚さ | … 自分たちの言葉のたくわえがある。 |
| ③多様なテキストとの対話 | … すでにもっている知識とつなげられる。 |
| ④言葉の吟味、考えの吟味 | … 言葉が流れていないか。吟味することでもう1つ上の段階に。 |

また、参会者の方々からも忌憚のないご意見やご指摘をたくさん頂くことができ、うれしく思っております。アンケートの内容も含め、真摯に受け止めるとともに、今後の研究に活かしていきたいと考えております。

秋田先生からいただいた「言葉の吟味・考えの吟味」につきましては、子どもの学びの質をよりいっそう高めていくためにこれから取り組んでまいりたいと思います。そして、これからは教師自身がよき学び手となり、質の高い学びを創る授業改革に挑戦し続けます。ありがとうございました。

国語科	『発想力・論理力・表現力』の育成を意図した単元を構想し、言葉の一つひとつに着目し、仲間との意見をつなぎながら、課題に向かう学びの姿を見ていただきました。各協議会で頂いたみなさまからの御意見を活かしながら、今後も確かで豊かな言葉の力を育む授業を子どもたちとつくっていきたいと思います。
社会科	今年度は『一人ひとりの学びの充実をめざして』をテーマに研究をすすめてきました。研究発表会では、3年「地域のおまんじゅう屋さん、そして“総本家 駿河屋”」、6年「紀州五十五万石元気プロジェクト～未来のまちづくり～」の授業を行い、それぞれ考えた問題をクラスみんなで話し合いました。
算数科	『子どもがつなげる算数科学習～自己内のずれを認識して～』をテーマに研究を進めています。研究発表会では、1年生の「ひき算」で虫食い算から数の規則性を見つける授業を、3年生の「あまりのある割り算」では、身近にあるカレンダーを教材に使い活用力を高める授業を公開しました。協議会で頂いた多くの示唆あるご意見・ご助言を今後の研究に活かしていきたいと思います。
理科	『自然の“文脈”をさぐる子どもを育てる理科学習～思いや考えを共有させることで～』というテーマで研究を進めています。3年生では、イメージ図に表すことでエネルギー概念を意識していくことができました。5年生では、「目に見えない物質」に対しての「目に見える事実」を積み重ねることで、粒子概念について考えることができました。協議会では多くの示唆あるご意見・ご助言を頂きました。
生活科	子どもたちが自分で見つけた「おくやまの木のみどり」を考えました。「夏は暑いから涼しいさわやかな感じのみどり色、冬は寒いからあったかい感じの赤になるんとちがう。」など子どもたちの意見でグループ活動が進み話し合いを深めていました。協議会は、グループ学習や生活科での教師の支援、生活科が理科・社会とどのようにつながっていくかなどを皆さんと学ぶことができました。
音楽科	「比べる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～（1年次）をテーマに、5年生2学級で同じ題材「重なり合う音の美しさを味わおう」を、2つの違った展開『ありがとう さようなら』を使って「度の和音がもつ魅力」にせまる / 『静かにねむれ』に自分たちで創意工夫をこらした和音を付ける で提案しました。約60名の先生方で活発な協議会が行われました。
体育科	今年度の体育科では、子どもたちの「かかわり合い」を中心に、「できる」「わかる」体育の授業を目指しました。学びの質の高まりに迫るために、2・6年では、ボール運動の基礎基本の技能を習得したり、学級独自のルールや作戦を考えたりしました。また4年生では、個人にあったゴムハードルの高さやインターバルを選択したり、ハードル走にリレーの要素を取り入れたりしました。
図工 工作科	美術館を授業場所とし、子どもたちが本物の美術作品から受ける感じを言葉に表し、互いに伝え合うことをねらいとした題材『あつめて ならべて おきにいり～びじゅつかんにいこう～』の授業を行いました。協議会では、貴重なご意見をいただき、また、現代美術コレクターである田中恒子先生のお話も聞かせていただいて、大変有意義な会となりました。ぜひ今後の研究に活かしていきたいと思います。
総合	「探究する学びを創る」をテーマに、4年では食育、6年では環境を内容の中心におき、「ほんまもん」体験からの子どもの学びをみていただきました。協議会では、多数の先生方に参加していただき、授業における子どもの真の学びとは何かをディスカッションしました。さらに助言の先生方には、パネルディスカッションにおいて「探究」を視点に多くの示唆をいただきました。
英語活動	子どもたちにも、先生たちにも活動しやすい展開を英語ノート Lesson7 “What's this?” で、授業を公開しました。外国語活動にとって大切なコミュニケーション活動では、子どもたちが考えた What's this クイズを参観頂いた先生方がゲストとなって参加してもらいました。協議会では、授業や外国語活動についての熱心な話し合いをもつことができました。
複式	授業公開 では、1・2年生算数、3・4年生国語、5・6年生理科の授業から子どもたちの学びの様子を、また授業公開 では、「複式協力プロジェクト」として、複式全体の子どもの関わりを見ていただきました。授業後の協議会でいただいた、たくさんのご感想やご意見を、これからの活動に活かしていきたいと思います。

たくさんのご参加を頂きありがとうございました。

小学校外国語活動の必修化に向けて！

～外国語活動の授業展開に焦点を当てて Part2～

外国語活動

5年A組担任

辻 伸幸



平成23年度からの外国語活動必修化に向けて、子ども達にも先生達にも活動しやすい外国語活動の授業展開プロトタイプ(原型)について研究を続けています。昨年度の本広報誌にも同じテーマで書きましたが、その時から更に授業展開プロトタイプを改良(図1)してきましたのでご紹介します。実際に子ども達と外国語活動を行う中で改良してきたものですから、安心して使っていただければと思います。新薬の承認と同じで、すでに授業実践という治験段階が終わり安全性も実証されています。つまり、子ども達を外国語嫌いにする危険性が極めて少なく、しかも、外国語活動の目標である「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことを目指すことができます。

【始まりのあいさつ】できれば外国語係などをつくって子ども達の呼び掛け(例えば“Hello! Let's enjoy English!”など)で始めるとよいでしょう。

【ウォームアップ】子どもたちの「外国語活動エンジン」を暖めるような役割をします。コミュニケーション活動で使う表現を含む短時間のゲームやクイズ歌などが考えられます。

【コミュニケーション活動場面の提示】は、コミュニケーション活動の場面を教師のデモンストレーションやビデオ、劇などで、示しゴールを明確にするものです。

【聞くことに慣れ親しむ活動】発声を強制せず聞かせることに焦点を当てた活動です。発音する前に、まず、耳で聞いて理解できる段階まで慣れ親しむことは、最近の研究で重要であることが科学的に分かってきました。ここでは、絵カードなどを使って単語や表現の意味を理解しながら楽しく取り組めるゲームなどが適しています。

【発音することに慣れ親しむ活動】聞いて理解できてきた単語や表現を発音することに焦点を当てます。日本語とは、大きく異なる発音やリズムに慣れ親しむ段階です。チャンツやゲームが有効です。

【準コミュニケーション活動】コミュニケーション活動へつなげるためのものです。例えば、京都の外国人観光客にインタビューすることをコミュニケーション活動と設定しますと、そのシミュレーションを行います。教室を京都の金閣寺に見立てて、ALTや担任が外国人観光客の役をして、インタビューの事前練習を行います。

【コミュニケーション活動】必然的なコミュニケーションが起こるような実際的な活動です。国際交流活動は、コミュニケーション活動として、最適の形態です。京都の外国人観光客や関西国際空港の外国人利用客へのインタビューや地域の外国の方との交流など取り入れることができます。

【振り返り】子ども達による自己評価などがあります。各々の活動についての3段階評価や自分や友達の良かったところなど自由記述することが考えられます。ポートフォリオとして、評価の一部に活用できます。また、指導者側の評価にも使うことができます。

【終わりのあいさつ】今日の活動を締めくくる児童か教師の簡単な英語で終わるといいでしょう。参考書や教材、情報が豊富にありますので、気軽に何でもご相談下さい。お待ちしております。

図1 外国語活動の授業展開プロトタイプ

【始まりのあいさつ】

【ウォームアップ】

【コミュニケーション活動場面の提示】

【聞くことに慣れ親しむ活動】

【発音することに慣れ親しむ活動】

【準コミュニケーション活動】

【コミュニケーション活動】

【振り返り】

【終わりのあいさつ】



アメリカの先生に自己紹介する子ども達

いろいろな木のふしぎ

～あきをいっぱい楽しもう！～
“なんで？ふしぎ！” 気づきの質を高めるために

生活科
2年C組
居澤 結美



生活科では、子どもたちの「気づきの質を高める」ために次の2つのことを大切にきた。

1つ目は、子どもたちが「夢中になって遊べること」である。

新学習指導要領・生活科内容(6)に「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊ばしに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。」とある。

今回、子どもたちは校内にある身近な自然「おくやま」に入り「たんけん」活動をした。おくやま(対象)にどっぷりとつかった子どもたちは夢中で木の実を採ったり、つぶしたり、葉っぱをちぎったり、走り回ったり、思いきり楽しんでた。普段なら少し擦り傷をすると「先生、消毒して下さい。」と言ってくるが、こけてもへっちゃらなほど夢中であつた。

葉っぱあつめをしていた子どもが「葉っぱの真ん中だけ赤くなってるよ。」とつぶやいた。“なんで？ふしぎ”の始まりである。これから、「なんで？ふしぎ発表会をひらこう」という学習課題を設定した。子どもたちにいきなり「ふしぎをさがそう。」といってもなかなかでてこない。

しかし、実を割って遊んでいた子が、「なんで、この実は納豆みたいにネバネバしてるんやろ。」、どんぐりをとっていた子が、「なんで、どんぐりって茶色やのに、これは緑色なんやろ。」と、“ふしぎ”に気づくことができた。これは自然だけにかかわらず、あそびの中で対象世界にどっぷりとつかるからこそできることだと考える。その中でさらに工夫したり、追求したりして新たな“気づき”に出会うことができる。また「もっとこうしていきたい。」と課題を更新したり見つけ出したりしていくこともできる。教師は子どもたちに“ただ遊ばせる”のではなく、ねらいをもって遊びを考え、単元を構成していくことが必要であろう。

2つ目は、「他者(友だち・教師)とかかわり合うこと」である。

自分が見つけたふしぎを他者に広げる。「見て！葉っぱの色違うで。」「うわー、ほんまや。」「見てみて、くんこんなん見つけたで。」と、“なんで？ふしぎ”を共有することができる。今まで自分が見てきた対象世界に新たな視点を加えることができる。一人では気づかなかつたこと、考えなかつたことが、他者とかかわることで見えてくる。「かかわり合う」ことは生活科だけでなく、普段の学校生活においても必要である。他者の声に耳を傾けることができる姿勢、自分の意見を話しやすい環境などをつくることを学級経営で心がけている。併せて低学年の学習活動では発達段階を考慮したペア学習やグループ活動を取り入れて、「かかわり合い」を深めている。

これらが新学習指導要領にある「気づきの質を高める」手立てになると考える。次に、気づいたことを整理する、表現する、書く、劇化するなどさまざまな学習活動を取り入れて、子どもたちの「気づきの質を高める」支援を考えていかなければならない。これからも生活科ではこの2つを大切に、子どもたちと教師がいっしょに楽しみ、喜びあえる学習を作っていきたい。



「見て！一粒でもネバネバしてるし、くさいよ。納豆に似てる！」
「やっぱり虫に食べられないためやと思う。鳥はどうかかな。」



「ねえ、ねえ。見てよ。」、「何？何。」
「こんなに硬いかわをしてるのに、中はめっちゃやわらかいってことは、やっぱり、食べられそうになっても、大丈夫なようにしてるんやで。」、「ぼくもそう思う。」
「けど、先生の言った、絵本で鳥が食べて種を運ぶっていうのは、どうなんかな。」

6年『電気の利用』 5年『電流の働き』
電気エネルギーの実感！

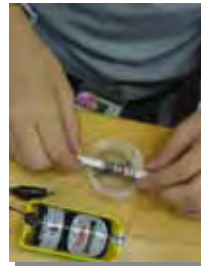
複式理科
5・6年F組担任
西村 文成



学習指導要領改訂で、理科の目標に「実感を伴った」という言葉が付け加えられました。自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図ることが目標なのです。「実感を伴った理解」とは、第1に具体的な体験を通して形づくられる理解、第2に主体的な問題解決を通して得られる理解、第3に実際の自然や生活との関係への認識を含む理解であると示されています。〔小学校学習指導要領解説理科編参照〕

このことを踏まえて普通の授業実践を考え、計画するようにしています。エネルギーの領域にあたる「電気の利用（6年）」と「電流の働き（5年）」での実践を紹介します。

1人1つの実験道具
を持てることを目指
して準備することが
豊かな体験活動につ
ながる。



電磁石ってすご
いパワーだ！



発電した電
気をためて
みよう！



電磁石のパワーを一人ひ
とりに**体感**させたい。

6年生『電気の利用』

「電気ってなんだろう？」から考え始め、手回し発電機を使って電気をつくったり、コンデンサを使って電気を蓄えたりしながら電気について探っていた。そんな中から、エネルギーの概念についても話し始める児童も出てき、電気の変換とエネルギー変換についても深めることにつながった。

5年生『電流の働き』

一人ひとりに乾電池、エナメル線(0.4mm)1m、方位磁針、ストロー、針金...を与え、たっぷり自由試行する時間をとり、学習課題を決め、実験に取り組んでいった。複式学級であるため人数は少ないが、それでも教科書に出ている実験課題はすべて自分達の課題として取り上げることができた。

気付いたこと・疑問をグル
ープで出し合い、自分達で
課題を決め解決に向け計画
を立てる！



具体的な体験活動

【自由試行】【内部情報の蓄積】

- ・自然に対する興味・関心の高まり
- ・適切な考察の基盤

壊れた電化製品を分解して
みよう！モーターやエア
ポンプにも電磁石が利用さ
れていることがわかる。



実感を伴った理解

主体的な問題解決

【問題意識】【課題設定】

- ・見通しをもった計画的な観察・実験
- ・知識や技能の習得

自然や生活とのつながり

【考察】【発展】

- ・理科を学ぶ意義や有用性の実感
- ・学ぶ意欲や科学への関心を高める

ご当地ソングは魅力的

～『紀伊万葉』 山部赤人が、なんとあそこで、この歌を～

国語科4年C組 担任 須佐 宏



新学習指導要領の完全実施を目前に控えて

平成23年度から新学習指導要領が完全実施される。国語科では、「伝統的な言語文化に親しむこと」が改訂のキーワードの一つとなっている。私が担当している中学年では、「優しい文語調の短歌や俳句について情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱したりすること」と記されている。短歌・俳句と言え、子どもたちを対象とするコンテストが多数催されている。また最近では、飲料メーカーが催す俳句コンテストなどもあるため、五・七・五（七・七）のリズムに親しむ機会が多いと言える。しかし、文語調の短歌や俳句となると、子どもたちには少し抵抗感があるようだ。そんな中で、子どもたちに馴染みのある文語調のものとしては、学校の校歌やお正月にする百人一首などが思い浮かぶ。それらを文語調の言葉への入り口に活用するのもいいだろう。

ご当地ソングは魅力的な教材

もっと子どもたちが身近に感じ、文語調の教材との距離を埋められるものとして活用したいのが、ご当地ソング（地域教材）である。自分が生まれ育ったところや毎日通っているところで詠まれた歌であれば、情景も思い浮かべやすく、親近感が持てる。幸い、私どもの学校がある和歌山市には、奈良に都のあった時代から、多くの歌人が訪れては歌に詠んだ場所が点在する。約四千五百首ある万葉集の歌にも、和歌山にちなんだものが百二首あり、「紀伊万葉」と呼ばれている。中でも、724年、聖武天皇の紀伊国行幸に随行した宮廷歌人山部赤人が和歌浦で詠んだと言われる「若の浦に潮満ち来れば 潟を無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡る」はあまりにも有名な歌である。しかし、子どもたちのほとんどはこの歌を知らない。よってこれを文語調の短歌・俳句世界への導入として扱うことにした。



目をとじて紀伊万葉を暗唱

紀伊万葉 ～あの山部赤人が和歌山のあそこで・・・～



本年の夏季研修会・公開授業で紀伊万葉を扱った。「若の浦・・・」の歌が詠まれた和歌浦・片男波は、本校からバスで数分のところであるが、夏休み中の授業でもあり、潮の満ち引きを見て感じるためには、かなりの時間を要する。よって、ICT機器を活用して現地の景色や歌碑などの画像を提示することで、約1300年の時をこえて同じ景色を見たであろう有名歌人の様子や、そのときの情景を思い浮かべられるようにした。授業では、まず石碑の写真を見せ、事前に百人一首で扱っていた「田子の浦にうちいでてみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」の歌を詠んだ山部赤人さんの歌であることに気づかせた。百人一首に選ばれている歌人が和歌山のどこかに来て詠んだ歌であることを知ると「どこや（だ）ろう。」「かたおなみって片男波のことかなあ。」といった声が聞かれた。その後、子どもたちは、使い方を学んで間もない漢字辞典を使って、「若の浦に 潮満ち来れば 潟を無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡る」の読み方をグループで協力して探っていった。五七五七七（実際は、六七五七七）の読み方を指折り数えながら説明していくうちに声に出して読んだり、意味を考え始めたりするグループも出てきた。授業の終わりには、石碑のある場所の写真や赤人が見たであろう潮の満ち引きを提示して、いにしえ人がこの地に立って歌を詠んでいる様子を思い浮かべながら、この歌を声に出して読むことを楽しんだ。

私たちの住む和歌山市に「紀伊万葉」があるように、それぞれの地域にきっと教材となるご当地ソングがあると思われる。授業者である我々が地域教材に目を向け、教材化することで、子どもたちがより興味をもって伝統的な言語文化に親しむことができるのではないだろうか。



ICT機器を活用して潮の満ち引きを見る。

物語を体験する読み ~複式中学年国語~
『ちいちゃんのかげおくり』と『一つの花』

複式学級
3・4年F組担任
三上祐佳里



【ちいちゃん表情を考えてみよう！ 3年生国語『ちいちゃんのかげおくり』】

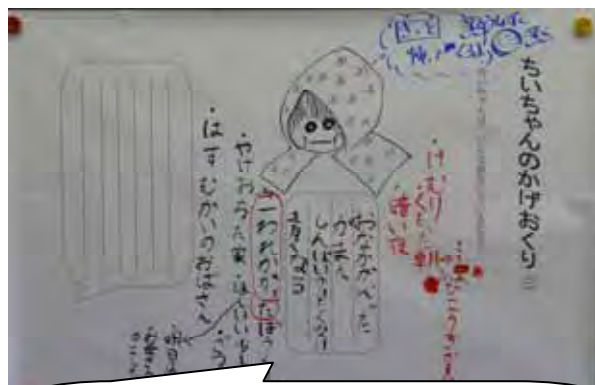
教科書には、ほとんどちいちゃん表情がわかる挿絵がありません。そこで「場面ごとのちいちゃん表情を考える」という活動を中心に、周りの様子やちいちゃんの気持ちを文章から読み深めました。また、それぞれの表情を考えた後には、その場面のちいちゃんに声をかけてあげることで、子どもたちがちいちゃんのそばで一緒に物語を体験できるようにしました。

子どもたちが考えた表情は、次の6つです。

- | | | |
|-----|------|------------------|
| 1枚目 | 一の場面 | (家族でかげおくりをする場面) |
| 2枚目 | 一の場面 | (お父さんが出征してからの場面) |
| 3枚目 | 二の場面 | (空襲で逃げている場面) |
| 4枚目 | 三の場面 | (一人ぼっちになっている場面) |
| 5枚目 | 四の場面 | (ふらふらになっている様子) |
| 6枚目 | 四の場面 | (きらきらわらっている様子) |

一の場面では、子どもたちは、話し合いから、「途中で表情が変わる」ことに気づき、自分たちで表情が変わる部分を探し出すことができていました。

四の場面のちいちゃんへの声かけで、ある男の子は「ちいちゃん、お母さんが帰ってくるまで、いっしょにまっていようね」と、まるで自分がその場にいるかのような声かけをしてあげることができていました。決して、国語が得意な子ではなく、どちらかというと挿絵ばかりを見ている子でした。この授業では、だれよりも教科書に線を引き、書き込みをし、しっかりと文章からちいちゃん表情を考えていました。ちいちゃん表情(挿絵)を考えることが物語のイメージを広げることにつながったように思います。



子どもたちが考えた、三の場面のちいちゃん表情です。表情を描くために、周りの様子や、ちいちゃんの考えていることなど、文章を手掛かりに細かく読んでいたことがわかります。

【ゆみ子に声をかけてあげよう！ 4年生国語『一つの花』】

4年生の『一つの花』では、それぞれの場面の一人読みの段階で、「ゆみ子ちゃんに声をかけてあげる」という活動を取り入れました。

自分がゆみ子にどんな声をかけてあげたのかを発表し、本文からその理由を言うことで、一人読みをして気になった文章を全員で確認しました。

複式の4年生8人が、全員同じような声かけをしていることは、ほとんどありません。自分と違う声かけをした子の意見を聞き、その理由を考え話し合うことで、今まで気にしていなかった文章に気づき、を持つことができていました。



どうしてゆみ子にそう声をかけたのか、理由になつていっている文や言葉に青い線が引かれています。みんな話した文には、赤い線が引かれ、書き込みがされています。

【少人数だからこそ話し合い】

複式3・4年生は、3年生7名(男子4名、女子3名)4年生8名(男子4名、女子4名)で構成されています。単式学級と違い、1時間の授業で一人ひとりが話す時間を十分に確保することができます。

クラス全員が自分の思いや考えをめいっぱい話せるように、『安心して話せるクラス』を目指しています。そのために、「話している人が安心して話せるように聞こう。」と取り組みました。取り組み始めてから、声が小さくあまり発言しなかった女の子も、だんだんと自分の意見を言えるようになってきました。人数が少なく、どうしても意見の多様性には欠けてしまう複式学級だからこそ、一人ひとりが安心して話せる環境を作ることが大切だと考えます。

《新刊書籍》 レポート

『質の高い学びを創る 授業改革への挑戦』

～新学習指導要領を超えて～



主幹教諭 西村充司

東京大学大学院教授：佐藤学先生と和歌山大学教育学部附属小学校職員とがまさに協同で創り上げた図書が2009年10月31日発刊・発売となりました。

「本書が提示する授業実践は「学びの共同体」を標榜し新学習指導要領を超える道筋を模索している。」序における佐藤学先生の第1文であり、松浦先生が締めくくっておられる通り、本校もまだ「質の高い学びのある学校に向かって歩み出したばかりである」。佐藤先生にもご指導いただき、授業改革への挑戦を始めて3年。我々がたどってきた足跡のみならず、何より子どもの学び合う実際の姿とそこに見える育ちを指針に、これからの実践の方向性にも触れている。本書をお読みくださった先生方とともに、真摯に挑戦を続けていきたい。

目次

- 発刊にあたって・今学校現場が求めているもの
和歌山大学教育学部長（前本校校長）松浦善満
序 新学習指導要領を超える授業実践の創造
東京大学大学院教授 佐藤 学
章：小さな変化（物語）を積み上げる「学校の改革」
章：和大附属小のICT戦略
章：近未来教室へのヒント 異学年複式学級
子どもが生きる教育条件整備（複式教育の試み）
章：学びの質の高まりをめざす教室改革
協同的な学びの実践
章：学びの質の高まりをめざす国語科の実践
章：プロジェクト型学習のデザイン
章：学びの質を高める
背伸びとジャンプのある学びをつくる
章：佐藤学さんの魅力と「学び」の共同
動き出した和大附属 松浦善満



お求めはインターネットで 送料無料(税込, 1890円)
東洋館出版社 amazon.co.jp

From Editors

和大附属小では、平成22年1月29日(金)に第4回ICT活用授業研究会2009を開きます。午後から8公開授業、ブースセッション、全体会など。詳しくは、本校HPをご覧ください。

和歌山大学教育学部附属小学校
〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号
TEL (073) 422-6105
FAX (073) 436-6470
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>
E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp